
ばいばいしたくないけれど

衣谷創

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばいばいしたくないけれど

【Nコード】

N6780P

【作者名】

衣谷創

【あらすじ】

ぼろぼろの服をまとい、両目の視力を失った男、アーシュヴィヒ・ヴィンド。愛しの君を思いながら砂漠をさまっているなか、一人の女が近寄ってくる。その姿をとらえる事の出来ないヴィンドはその女を会話し始めるもの……
グリム童話「ラプンツェル」をモチーフにした短編。

(前書き)

本作は「グリム童話 ラプンツェル」(KHM 12, Rapunzel)をモチーフとした一次創作として認識しております。

眩しいかもしれない。

足元は黄金の砂粒で埋め尽くされ、黄鉄鉱の絨毯が地平線まで広がっている。視界をさえぎるものといえば、その黄金の堆積で出来た山ばかりだった。その上を漂う空気は、足元の印象とは全く正反対で、体の芯から凍って、何かの拍子で割れてしまいそうなほどに寒かった。

男が重い足取りで、足を引きずりながら歩いていた。彼の着ている服装を見れば、歩いてというよりも、さまよっていると表現するが的確かもしれない。

上から下まで、上等そうに見える金の糸がふんだんに使用され、布地自体も、ところどころに高級感が漂う。そこらにある布とは、艶や、彼の動きでその端が揺れているその様子も、違うものだった。だが、その上質な服も、ところどころ裂けていて、もはやその上質さからくる価値を失っていた。もしくは、古めかしさが生まれたとでもいえようか。

男は自らの腕で自身を抱きしめながら、顔の向きを定めようとはしていなかった。むしろ左右上下斜めと、全く定まっていなかった。

目がなくなっていた。目の亀裂があるべきところは赤黒い痕跡となっていて、黒目や白目の存在を見ることができない。傷の痕跡は目の部分だけではない、頬や鼻頭、手の甲にも見られる。

その男に接近する存在が一つ。露出度のかなり高い服装だ。

「ちよつと、その人」調子のよい、甲高い声だった。「ちよつと待ってよ」背後から声をかける。

男の足が止まる。

「どなたですか」顔を左右に、のろい動きで振るばかりだった。「どこにおられるのです」

甲高聲はスキップで男の背後に近寄って、数フィートのところで

足を止める。

「後ろだよ」肩を二回、軽やかに叩く。

男は背後に振り返った。だが相変わらず視線を定めることができない。

「あなたは？」空に向かって言葉した。「私はアーシュヴィヒ・ヴィンドと申す者ですが」

黄色声は口をわずかに開けて、小刻みに頷いた。口角が互いに離れてゆき、弓なりの微笑が宿る。

「ヴィンド？　じゃあおとなりの王子さまだね」一歩後退りして、くるりと一回転してみせる。「私はフェーだよ」

フェー、とヴィンドは口にする。頭の動きが止まった。顔の向きは、ようやくフェーを捉えた。

「あなたは、失礼ですが、人間でいらっしやらないのですか？」鼻をすする。その音がはしたなく響く。「名前もそうですし、匂いも、人間ではなくて、森の匂いがします」

フェーは笑みを濃くして、速い動きで手を打った。

「すごおい。さっすが王子さま」ヴィンドの周りを小走りで一周する。「いろいろな人と同じこと言ったけど、初めて気付いてくれたよ」

フェーはヴィンドの正面で足を止め、前屈みとなった。ヴィンドの顔を下から覗きこむ状態となった。

「私の名前はクーア」にんまりと笑みを浮かべる。「よろしくね、王子さま」突如ヴィンドを抱きしめて、腕でヴィンドを縛りあげる。ヴィンドは再び、クーアに顔を定めることができなくなったらしく、鼻頭を空に向けている。

「君は突然何をするのですか」あたかも首が座っていないかのように、首をぐらぐらさせる。「急に動いたりしないでください、やるときは声をかけてからにしてください」

「あ、ごめんねえ」

クーアは撫でるように、ヴィンドから腕や手を離していった。

「ねえ、どうして王子さまの目は潰れてるの？」
「ヴィンドの頬を右手に吸いつけ、向きを自らと対面するようにさせた。」
「こんな赤黒くして。誰にやられたの？」

ヴィンドは左手を持ち上げ、クーアの右手に這わせた。

「これはゴテルの魔女によるものなのです。」
「クーアの右手を、その手に貼りつこうとする頬から引き剥がす。」

クーアは感嘆に似た声を上げた。

「私知ってるよ。あのサラダ菜魔女でしょ。」

「え、まあ、そうですね。」

ヴィンドが首を縦に振る。微々たる動きだった。

「魔女はとても美しい女性を監禁していました。ラプンツェルという、まさしく瑞々しい頬をした女性です。私はすっかり一目惚れしてしまい、連日のように魔女の目を避けて会いました。ですが、ある日突然、魔女と会ってしまい、ラプンツェルは猫にさらわれたのだというのです。私は悲憤して、高い塔から落ちてしまったのです。そのとき、いばらで目をだめにしたのです。」

クーアはヴィンドの正面で、いきさつを静かに聞いていた。その言葉が尽きると背後に回る。背中に両手を、指先からぺたりと貼るように、くつつけた。

「ねえ、仕返しとかしたの？」
「背中から脇腹に這わせ、腹に到達させる。」
「失明させられたんだから、普通の仕返しじゃだめだよ。」
「しつこいぐらいに自らの体をヴィンドに密着させる。」

ヴィンドはすぐさま、腹の右手を剥がした。体を半回転させて、左手をも振り切った。立て続けに二ヤードほど離れる。体の上下運動に合わせて、腰にくつついている剣の鞘が揺れる。これもまた眩しいものであったであろう装飾である。

「それどころじゃありません。」
「ジャケットの下部を掴む。少しばかり引つ張ったせいか、破けている部分から断裂音がした。」
「ラプンツェルに会えないと思うと、悲しくて仕方がないのです。」

クーアは、ヴィンドに這わせていた腕を、今度は自らの腹に巻き

つけて、大笑いしだした。砂漠中にこだまするほどの大音声だ。

「まさか本当に、猫がさらったって思ってるの？」左右に何度も体をよじる。「猫なわけないじゃん、絶対にあのサラダ菜がどっかに隠したり捨てたりしたんだよ」

クーアは体を思いきりよじって絞り、笑いを出しきった。わずかに荒くなった息をしながら、ヴィンドの背中に視点を合わせた。

「思いつきりすごい仕返ししたらさ、懲りて場所とか教えてくれるかもよ」よじりを元に戻す。「私も昔、サラダ菜には酷い目に遭わされてるから協力するよ」

「しかし」

「なんでためらうの？」

再び迫るクーア。

「王子さまはサラダ菜のせいとそのラプンツェルさんと会えなくなつて、その上目まで潰されちゃったんでしょ？」

笑みから一転、クーアのその表情は疑念を呈していた。先ほどまで、吊り上げられていた頬に潰されていた目はまん丸となり、細長くなっていた口もまた縮こまっている。頬にできている膨らみも、さつきより下部に移っていた。

しかし、とヴィンドは同じ言葉を繰り返す。

「早くどこかにいるラプンツェルを捜し出さなければ」左手がぶるぶると震え、それが伝染したかのように、右手に震えが発生する。

「今もどこかでラプンツェルは悲しんでいるはずです」腕をも震わせる。

クーアはヴィンドの両肩に思いつきり手を叩きつけ、それを二回繰り返した。

「だからこそなの」もう一度叩く。「こんなだっ広い世界を歩き当たりばつたりで探すよりも、隠した本人から吐かせるのが一番手っ取り早いでしょ？」

クーアの視線が下がった。ヴィンドの横に揺れる、ピカピカとした輝きが汚れて台無しとなっている剣だった。

「ねえ、この剣を使うのはどう？」左肩から腕にかけて、自身の手を滑らせてゆき、ヴィンドの肘のところ、剣の柄頭へと手をジャンプさせた。「これでサラダ菜畑をぐっちゃぐちゃにしてさ」

クーアはヴィンドの背後から左側へぴよんと移動し、両手を柄頭に乘せた。

「あの馬鹿魔女の住んでる塔をどんどん壊していくんだよ、下から順番にどかあんどかあんって」その顔にたたえるものは画策の笑みだった。「想像してみてよ、サラダ菜畑がぐっちゃぐちゃになって、その上さ、塔がどんどん縮んでいくのを見てあたふたするサラダ菜魔女」

クーアは突如、「あっ」と素っ頓狂な声を発した。

「でもあの魔女じゃ、それだけじゃ吐かないかも」手を剣から離して腕を組む。目を瞑って首を傾げ、唸りのような声を漏らす。口許はしかし、まち針のように、鋭く一の字となっていた。

クーアはぱつと目を開くと、腕の絡まりをほどいた。ほどくなり手拍子を一ツ。

「やっぱり直接サラダ菜魔女をいたぶるのがいいや」手を合わせたまま言葉を繋げてゆく。「最初はぼこぼこにしてさ、それでも答えなかったら手首を一つずつ切り落とすの。それでもだめなら、今度は足首。それでもだめなら肘肩、膝股関節。それでもだめなら、私が魔法使って死なないようにして、延々と痛みつける」右手を左手から外して、右手人差し指で剣を突つつく。「ほら、想像してみよ、あの傲慢な魔女が私たちに恐怖する姿とか表情」

砂を巻き上げるほどの、突風が吹いた。遠くが真っ黄色になって、視界がなくなるほどの砂嵐だった。ヴィンドとクーアに風が襲い、次の刹那、黄金が細かな銃弾となって、二人の頬を攻撃した。きゅと短い声を上げて顔を覆い隠すクーア。俯く以外は何ら変わりないヴィンド。風速が落ちる。クーアが顔を覆っている手を少しばかり離れた。タイミングを見計らうかのように、一撃。より強力なもので、耳の傍で乱れた気流が、大音量で鳴った。

ところで、立ち止まった。「非常に愉快だ」切先を下にして振り上げた。彼の大声が伴う。

ヴィンドが発する大音量の音とともに、刃が落ちていった。彼の腕と腰とによる力でどんどん加速し、刃の先端が服に刺さった。

切先が、あつという間に皮膚と接する。ヴィンドの狂気がその皮膚を切り裂いてゆく。その刃を、体内組織が待ち受ける。タンパク質の組織自体を刃はいとも簡単に破壊する。胸骨を横目に、通常純粋な金属を有さない領域を突き進む。正面には動く赤球だ。躊躇なく直撃。貫通。一旦剣の動きが止まる。再び数センチメートル進む間髪を容れずに、刃が抜ける。穴から血が、ダムの放流が如く流れ出た。

ヴィンドは剣を抜くと、右手を柄から離してしゃがみ込み、その右手で間欠泉状態の傷口を探った。傷口の上で右手が止まるなり、指をすぼめる形にして、押し込みはじめた。第二関節ほどまで埋まると、体重をかけて押し込む。あるところで押しこむのを止め、腕を捻りだした。間欠泉が激しくなった。

ヴィンドは手をクーアから抜く。真っ赤な血が、手から垂れている。

「目の見えない私にも分かる、殺したぞ」右手を握り拳にしたり開いたりを繰り返している。指の付け根で、赤い膜ができ、すぐに破けるという動作が繰り返されていた。「私は殺したぞ」顔を空に向け、誰もいない砂原に轟く咆哮を上げた。

不意にヴィンドの口が小さくなった。口の形状が楕円になって、ぴくぴくと震えている。

「ラプンツェルがやってきた」いかにも首が不安定であるかのよう
に、顔をいろいろな方向に向ける。「悲しい、ラプンツェル、どこ
なんだ、ラプンツェル」

ヴィンドは剣を落とした。両手で目があったところを押さえる。首を左右に振りながら、激しく身もだえる。

「ラプンツェルはどこなんだ、どうやったらこの悲しみを取り除け

るんだ」次第に姿勢が低くなって、しまいには、両手で顔面の、額の下を押さえててしゃがみ込んだ。

つきたての餅のように柔らかい音が聞こえた。人声だ。甲高い声だ。どうも歌っているらしい、はつきりとした歌詞は潰れてしまつて判別することができないが、しかし美しく配置された音符が空を舞っている。

ヴインドは顔から手を離した。

「人だ」呟くように言葉した。黄色い声がのびやかに伸びて、細くなつてきたところで、同じ単語を繰り返す。「そうだ、殺しだ、誰でもいい、誰でもいいから、人を殺せば、悲しみはなくなる」

血まみれになつている右の赤黒い傷跡に、突如白い部分と蒼い部分が見れた。はじめは静止していたが、急に蠢きだす。右や左などあらゆる方向にだ。傷の赤や黒、鮮血の赤に染まつた部分の中に、本来あるべきものが現れた。

ヴインドの口元が再び歪んだ。顔面に出現した笑みには、純粹さは一切感じられない。その表情には、依然として存在していない左目の部分から何か恐ろしいものを出しそうな、そのような勢いがあつた。

真珠を転がす声はまだ続いている。

その声に、剣の切先が向いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6780p/>

ばいばいしたくないけれど

2010年12月24日11時10分発行